

ジャン＝ジャック・アンペールと プロスペール・メリメ

江 口 清

A. F. Villemain と共に比較文学の先駆者として Jean-Jacques-Antoine Ampère の名を知ったのは、メリメを通じてである。メリメが後年ロシア語を学び、ジプシーの話す言葉にまで興味を抱くに至ったのは、若くしてアンペールと親交を結んでいたことが、あずかって大いに力があつたと思う。Ampère についてはこの国に殆ど紹介されておらないので、メリメの膨大な書簡をひもどきながら、二人の文学者の在り方、及びその経緯を語ろう。

じじつメリメがマクファスンによって訳された老吟遊詩人オシェンのロマンティックな詩を読むことができたのは、少くともアンペールのおかげであった。「アンペールの法則」の発見者、電磁気学の基礎を確立した André Marie Ampère (1775～1836) を父にもつ、生れながらにして学者の家に育った Jean-Jacques は、数学・物理学は申すに及ばず、エジプトの象形文字からシナの哲学まで究め、さては中世の仏文学からスカンディナヴィアの文学にまで視野をひろめ、もちろん西欧諸国のあらゆる言語・作家に通曉している碩学であった。

父親と同じくリオンに1800年8月12日に生れた Jean-Jacques は、しかし苦学力行の人 André Marie とは違って、順境のもとに育ち教育を受けることができた。プロスペール・メリメは1803年の生れだから、Jean-Jacques は彼より三歳年長である。二人が知り合ったのは、メリメが十二歳、アンペールが十五歳のときで、メリメが通学していたナポレオン中高

等学校においてであった。

メリメの父レオノールは1807年から画筆を捨てて、終身書記官の肩書で、美術学校の運営に当たっていた。そして今度は画家としてではなく、一介の Amateur として美術に打ちこんでいた。そして学校の近くの Neuve-Sainte-Geneviève（今日の Gournefort 街）に転居したメリメの家には、教授、学者、芸術家といったインテリ層が集った。またそういった関係のイギリス人が、少なからず訪れた。高名な学者を父にもつアンペールは、この慎ましい中産階級の炉端に喜んで迎え入れられた。

プロスペールはナポレオン中高等学校を卒業後、父親の勧告に従ってパリ大学に入学し、彼自身は法律には興味がないくせに法学部に入学して、23年1月に試験成績三つの乙で baccalauréat を通り（旧制度に依る）、3月に collège 教員適格証明書を授与されて、8月に卒業した。在学中彼は法律以外の自分の好むもの、英語、スペイン語、ギリシア語、さらに哲学から妖術までも研究したという。

一方アンペールも大学で哲学を修め、新進学徒として将来を嘱望されていた。プロスペールは後に、この年来の友について Sainte-Beuve 宛にこう書き送っている。「アンペールの不幸は好奇心にあった。彼はなんでも見、なんでも知ろうと欲した。彼はいろいろと無駄なものを学ぼうとし、とうてい手の届かぬものまで学びとろうとして、時間を空費した。このようにして彼は数か月のあいだ、司祭となり盗賊となり果てた一人のばか者の勧告に従って、生れつき聴く耳も持たないくせに音楽を勉強しようと望んだ。彼はまた同じようにして数学と物理学を勉強しようと志したが、これもまた不成功に終わったのだ。

彼は視力が弱かったので、素描することも、画布の色の効果を見ることさえも出来なかった。それなのに画廊で美術品を観るのに多くの時間を費していた。わたしは一緒に近東へ行ったときのことを思いだすが、彼はよく沈む夕陽を眺めるために高い所へ登りたがった。そのくせ彼は、少しで

も感激的なイメージを捉えることはできなかった。いざ描写するとなると、彼はごくあり触れた漠とした印象しか掴んでいないことがわかった」。

たしかにアンペールの好奇心は旺盛だった。彼は大陸は元より海の彼方にまで渡ろうとしていたのであって、精神上においてもその著名な父親の遺鉢を継ごうと期していた。それゆえ前述したようにフン族の王アッチラの生涯を詩作しようとまで望んでいたのである。

その点メリメのほうが遙かに気が楽だった。父親はプロスペールを弁護士にしようとして法律を学ばせたのだが、やがて息子に安全にして確実な役人の運命しか望まなかった。プロスペールにしても、何か突拍子もない職業を選ぶことによって、父親の慎重な計画を覆すほどロマネスクな青年ではなかった。だが両親の生活が楽だったので、それほど急いで身を立てる必要もなく、思うがままに創作に打ちこみ、また自由に遊びまわる余裕があった。メリメの文壇デビューの経緯については割愛しよう。ただ彼がアンペールと一緒に、1820年1月に前記オッシアンの詩を訳出していることを言うにとどめる。

ところで、当時のフランスの若きジェネレーションの作家に影響を与えたのは、バイロン卿であった。メリメがバイロンの諸作品から汲みとったものは、バイロンその人の人となりであった。おそらくは卿の、あのダンディぶりも、彼を魅したことだろう。バイロンはじつに多くのものを、ロマン派の連中がすべて漠然と夢みていたように、南欧や近東を見てまわったのである。メリメもやはりそうだが、アンペールも後年ノルウェーからイタリアへ、エジプトのヌビアから北米へと足を伸ばした。おそらくメリメは、そのような異郷の新しい風俗の中に特異な情熱をみいだそうとしたバイロン卿の強烈な意欲を感じとったにちがいない。彼はそれらを“The Pirate”や“The Giaour”の中に瞥見していた。そしてメリメは、それらの陰惨なドラマを彼なりの遣り方で再現しようと、秘かに期していたのだ。メリメは1830年3月7日、及び6月3日の「国民新聞」に『バイロン

卿の回想録』と題して、主としてバイロンの友人トマス・モアがバイロン自身の『回想録』を焼き捨て、モア自身がバイロンの伝記を書いて、それにバイロンの日記の断片を註釈もつけずに発表したことを攻撃している。メリメはバイロンの大貴族としての横柄さや、社会の恥部を平気で犯す大胆さや、その冒瀆的な言辞とか、その放蕩ぶりや、醜聞を惹き起す破廉恥な行為などを、けっしてあげつらったり責めたりはしなかった。メリメはバイロンに比すれば貴族的でなく、はるかに感激的でなく、またはるかに慎みぶかい彼なりの遣り方で、同じような不信心ぶり、同じようなシニスムを好んで求めたのであって、ブルジョワのサロンにおけるドン・フアンとして、また舞台裏のバイロンとして、当時のパリにおける料亭「ロトンド」や「プロヴァンス兄弟」に足繁く通っていた。

メリメに比すればアンペールの生活は少くとも外見はまともであって、1830年には彼はマルセイユの大学で文学の講座を開いていたが、7月革命勃発とともにパリへ呼び戻され、ソルボンヌ大学で Fauriel や Villemain の補講をした後、1833年には Collège de France で、Andrieux のあとを受けて仏文学史の講義をするに至った。折しも la Revue de Deux Mondes が1829年に創刊された。この恰かも国際交流機関誌の観のある同誌にメリメもアンペールも寄稿するようになるのだが、Philarète Chasles が何故 “Littérature étrangère comparée” (比較外国文学) なる用語を選んだかを説明したのに呼応してアンペールもまた、1830年と32年の講義題目に “l’histoire comparative de la littérature chez tous les peuples” (あらゆる国民における文学の比較史) “cette étude comparative sans laquelle l’histoire n’est pas complète” (この比較研究がなければ歴史は完全ではない) を挙げている。

さてプロスペールもアンペールも共にバイロンの小説を耽読し、そのロマンティックという点では二人とも共鳴していた。だがこの一致は、まもなくして破れるようになる。後年メリメは次のように述懐している。

「あの男は非常に性格が烈しく、あらゆることに対して決然たる態度を執っていた。それなのに彼は、ある男たらしの一老婦人のために去勢されたのだ」と。

この男たらしの老婦人こそ、ほかならぬレカミエ夫人であった。つとに文学史上に著名なこの美貌の才媛については、ここでは詳述を避けるが、夫である銀行家レカミエ氏が事業に失敗してからはスイスのスタール夫人の許に身を寄せ、1814年頃からバンジャマン・コンスタンと昵懇になり、やがて王制復古となって再び夫が失脚すると Abbaye-aux-Bois に引き籠り、ここにサロンを開いて知名人を迎え入れていた。シャトーブリアンが客の中の主役で、30年の7月革命以後政界を退いた彼は、毎日 rue du Bac の彼の屋敷からここへ通いつめていた。つづいて終生彼女の側を離れなかった哲学者の Ballanche をはじめとし Delacroix, Thierry, Tocqueville, J-J Anpère, De Montmorency, Lamartine, Balzac, Quinet, Lamennais, Humboldt, 女優の Talma, といった錚々たる顔振れで、アカデミー・フランセーズの外郭団体とも言われていた。後年アカデミー入りを願った Sainte-Beuve もこのサロンに姿を見せ、その“Causerie du lundi”の中で、夫人の老シャトーブリアンに対する献身的な態度の並々ならぬことを述べている。その“Mémoires d'outre-tombe”の朗読もこのサロンで行われ、それがこのサロンの名声をいよいよ高めたという。

アンペールが夫人と相識ったのは1820年というから、夫人は43歳、彼はわずか20歳にしか過ぎなかった。熱しやすいこの青年は、他の男たち同様、すぐにこの女性の虜となった。そして他の男と同じように、彼もまた掴まれ、抑えつけられ、「森の僧院」の狭いサロンの中で、巧みに飼い馴らされたのだった。その後20年にわたる情事は、単純な心の持主であるジャン＝ジャックにとっては、まさに偉大なる恋愛ともいうべきものだった。アンペールはレカミエ夫人に、このように書き送っている。

「あなたは、わたしにとってすべてです。わたしの母であり、妹であり、

愛する妻であり、そしてその微笑でわたしの心を浄め、すがすがしくしてくれる天使でもあるのです。」

メリメは、あまりに大風呂敷をひろげる誇張癖のある人間を好まなかったが、貞淑ぶってしかも衣服を脱いでいるといった、一見いかにも淨らかな純白な装いをしながら、そのくせ嬌態をしてみせる女たちをも好まなかった。アンペールがメリメを夫人の許へ連れて行ったとき、プロスペールは彼女のことを「^{かど}角ばった胴体、醜い手足」と感じ、いかにも気の利かない女だと思った。メリメは自分自身がシニカルなくせに、このように^{うわべ}表面をつくろって淑女ぶっている女が大嫌いだった。彼は欠伸をしながら、呆気にとられている友人をあとに残して、このわざとらしく飾りつけられたサロンから出て行ったという。このようなメリメが、アンペールの願いを容れて夫人がプロスペールをロンドンへ大使として赴任する duc de Laval の秘書官に推挙したのを断ったのは、けだし当然と言えよう。

アンペールはしかし、夫人との結婚が不可能なことは、よくわかっていた。さりとて父親が望んでいるように、比較解剖学、古生物学の創始者 Georges Cuvier の義理の娘（キュヴィエ夫人の連れ子の二人の娘の一人）Clémentine との結婚にも踏み切れず、1826年8月6日に、友人 Jussieu らと共にドイツへ向って旅立った。一行は最初オーヴェルヌからジュネーヴをまわって行くつもりだったが、ニームからラ・シャルトルーズへ行き、それよりジュネーヴ、ストラスブルグを経てボンに数か月滞在した。

パリの植物園内に現存するキュヴィエ家のささやかなサロンは、当時は毎週土曜に開かれ、その集りには Humboldt をはじめ Delacroix, Stendhal, Mérimée, Ampère, Jacquemont, David d'Angers 等が常連だった。メリメのイギリスの友人である弁護士の Sutton Sharpe も、渡仏すれば必ずこのサロンに姿を見せていた。メリメが「マンモス嬢」と渾名をつけていたもう一人の令嬢 Sophie にシャープはぞっこん惚れこみ、もう少しのところで結婚するところだったという。だが、キュヴィエの学識豊かな話

が大いに人を惹きつけたこのサロンも、27年9月28日にクレマンティースが胸を患って逝去して以来、閑ざされることになる。

1941年からメリメは、Charles Lenormant と Ampère と共にナポリからギリシア、小アジア方面を旅行し、42年の1月はじめにパリへ帰った。ギリシアで彼の心を打ったのは、劇場のみすぼらしさと、人物や行動や思考の偉大さとのコントラストであった。ギリシアは彼には、すぐれたメダル、人間の歴史のすばらしい縮図としか写らなかった。それらを究めるには、このうえないガイドである Charles Lenormant のような人物を必要とした。三人ともう一人 Jean de Witt と四人で、テルモピレスを訪れた。一行は裏切りがペルシア軍をして山間の隘路を迂回せしめた小道をたどった。そこは二千年前にスパルタ軍にペルシア近衛兵の接近を知らせたところだった。彼らはヘロドトスの描いた情景を目のあたりに見る思いがして戦慄した。

ルノルモン氏にとってはたいへん気のどくなことであったが、テルモピレスで彼は落馬して肩を脱臼した。アンペールとメリメとは、なおも小アジアの旅行をつづけた。二人は、Smyrne から Éphèse へ向う旧街道をとった。一人はデッサンをしながら、一人は夢想到に耽りつつ、エフェーズに到着した。メリメはその友に奇妙な形をした野蛮な建造物を示し、「これがローマ人どものために働いたギリシアの一芸術家の手になったものさ」といった。

旅行者は Éphèse から Magnésie へと赴き、さらに Tmolus を横断して Sardes へと向った。そして Sardes のアクロポリスへ、晩の十時に着いた。砂金の河床はなかったが、Pactole の水浴びは二週間にわたる騎馬旅行の疲れを癒してくれた。

ローマに着くと、アンペール宛のシャトーブリンの手紙が来ていた。アンペールに対し父親のような愛情を示しがっていた“René”の著者は、

メリメにも拶拶することを忘れなかった。メリメとアンペールは、42年1月はじめにパリへ帰った。

アンペールは、1840年8月22日に Académie des Inscriptions で、大学の議義をまとめた “Histoire littéraire de la France avant le XII^e siècle” 3 vol (1839～40年刊) により le prix Gobert を受けて以来、つづいて “Recherches sur la formation de la langue française” でまた「ゴベール賞」を獲得、さらに “Introduction à l'histoire de la littérature française au Moyen Age” (41年刊) で三度「ゴベール賞」を受けた。因みに le prix Gofert とは、ナポレオン・ゴベール男爵により設定された文学賞で、フランスの歴史についての労作に対し、年間二人 l'Académie française 及び l'Académie des Inscriptions を通じて賞金1万フランを贈ったのである。メリメは42年11月12日発信の手紙で、有力な l'Académie des Inscriptions の会員 Royer-Collard 宛に書いている。

「昨日わたくしがお話した問題は、アンペールが立候補するので非常に複雑になったのです。まあ、彼の友人たちがそうさせたのでしょう。彼の立場はこうなのです。あの男は三年この方ゴベール賞を得ています。で彼は、本年それを獲得しそこなうことを恐れ、名誉をもってその立場から脱却するには、アカデミーに立候補することが一番自然で、また一番立派な遣り方なのです。あの男は、わたしなどよりも、ずっとチャンスに恵まれているわけです。ところがその場になって彼は、賞を保持したい望みと、彼が立候補しないことで今まで彼を支持していたアカデミーの会員を失望させる恐れのあいだで躊躇しているのです。わたしたちは今朝会いました。そして互いにそれぞれの地盤をそっと探りを入れて調べ、その上で了解し合うことにしたのです。わたしは手を引きましょう。というよりも、アンペールが立候補した節は、彼と鼻を突き合わせるようなことはしますまい……」

アンペールは幸いにして 42年12月23日に、投票35票の中23票を得て

l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres の会員に選ばれた。メリメもまたその翌年11月17日に、同じく「碑銘及び学芸アカデミー」の会員に選出された。そのときアンペールはエジプトのコレクションの研究のためにローマへ行っていたが、メリメへ一票入れるために急遽旅行を切りあげて帰ってきた。

仏のアカデミーのうち最高のものとされている l'Académie française には、メリメのほうが一足早く44年3月14日に、サント＝ブーヴと共に会員に選出されている。メリメのときは大変な激戦で、7回も投票を繰り返した。この投票模様は、いわゆる「アカデミーの会員」になることが如何に大変なものか、まざまざと見せつけられる思いがする。参考までに——投票数36、その絶対最高得票数は19票。

第一回の投票結果は、Mérimée, 10; Casimir Bonjour, 7; Aimé Martin, 7; Vatout, 5; A. de Vigny, 4; Emile Deschamps, 2; Onésime Leroy, 1。

第二回目は、Mérimée, 11; Bonjour, 10; Vatout, 5; Vigny, 5; Martin, 4。

第三回目は、Mérimée, 13; Bonjour, 12; Vatout, 5; Martin, 4; Vigny, 2。

第四回目は、Bonjour, 15; Mérimée, 14; Vigny, 4; Vatout, 2; Martin, 1。

第五回目は、Mérimée, 17; Bonjour, 14; Vigny, 5。

第六回目は、Mérimée, 18; Bonjour, 13; Vigny, 4。

第七回目は、Mérimée, 19; Bonjour, 13; Vigny, 4。

入会式の席上では恒例により物故した前任者の功績を称える演説をすることになっているのだが、メリメにとっては前任者の Charles Nodier は冗長きわまる、ただ物知りぶった作家でしかないというので、顔面蒼白で壇上に立った彼は、思い切って冷たい批判をノディエに浴せたのだった。

ジャン＝ジャックは1847年4月21日に、詩人であり哲学者である Alexandre Guiraud 男爵のあとを受けてアカデミー・フランセーズの会員に選ばれた。48年2月15日にアンペールは、アカデミー・フランセーズの議長 Lebrun 宛に、このように書き送っている。

「親しき友よ、あなたの友情は別として、わたしを賞賛する仕事が多分にむずかしいかと思ひ、ほかの人の幾つかの作品と一緒に “la Science et les lettres en Orient” と題する著述に入っているわたしの別のいろいろな仕事をお送りします。この著述の目的は、東洋における新しい研究の主なる結果を知らしめることにあるのです。」

さて、いよいよアンペールがアカデミー・フランセーズに迎えられた48年5月18日の当日、メリメはその歓迎演説をすることになる。その要旨は

「……偶々このような役を仰せつかったのは、わたしとしては欣快とするところであります。思っても見給え、30年前にわたしたちは同じ学校の椅子に腰かけていました。それが今日アカデミーで同席し、こんどは決して離れることなくして終生それぞれ文人としての野望を満たし、研究に邁進することができるのであります……」

それより前任者ギロー氏のアカデミー・フランセーズに尽した功績を賞め称えたあと、アンペールがその著『12世紀以前の仏文学史』及び『仏語形成についての考察』『中世仏文学史研究序説』によって「ゴベール賞」を受けた業績に言及し、なお彼の見聞を拓めるに至った数々の旅行に触れたあと――

「わたしは君の東洋の文学、インドやペルシアの叙事詩、シナの演劇についての考察、それらの君に他のアカデミーの門戸を開かしむるに至った諸労作が、詩的な創作や比較的な批評 *critique comparée* に関する君の一般的な研究と関係がないとするならば、敢えてここでは言及しまい。この新しい学問は、かつてのわたしたちの師、現在はわが同僚である著名な教授がその方法を創設したのだ。(疑いもなく Abel François Villemain

をさしている。ヴィルマンは1821年に31歳にしてアカデミー・フランセーズの会員となり、34年にその常任書記に任命されたのだった。“Tableau de la littérature au dix-huitième siècle” 5 vol, 1823. “Tableau de la littérature au moyen âge en France, en Angleterre, en Espagne et en Italie” 2 vol, 1830. “Etude de la littérature ancienne et étrangère” 1830. その他の文芸批評において、はじめて作家とその社会環境、つまり文学と文明との関係に言及し、いわゆる比較的な批評を試みて、Sainte-Beuve に先鞭をつけたのである。——筆者補）西欧の文学と東洋の文学とを思慮ぶかく近づけ、より以上広範にわたる発展を与えることは、君にふさわしいものだった。その学殖は、ときには恐ろしい仕組みをもって君のペンの下に隠され、魅力ある形式をとっている。君はその成果だけをわれわれに見せようとして、その労苦をわれわれに隠すのだ。君の著述の中には、わたしの仕事の目的とはかなり掛け離れたものがあるが、その文章の明晰にして優雅な点を見通すわけにはいかない。けっきょくわれわれは、最近の東洋の文献学の発見をあらゆる読者階級に知らせたことで、君に感謝しなければならないのである。……君はさまざまな文学作品の中で一好事家の忍耐と聡明さとを以って美のあらゆる源泉を追求する一方、まったくフランス的な君の趣味、解義するためには利発であり、生み出すためにはまた豊かである君の精神は、その批評的な著述に、特異な作品としての性格を与えたのである……」

その年アンペールは“La Grèce, Rome et Dante”を刊行した。また同年7月4日には、シャトーブリアンが永眠した。アンペールはこの偉大な文豪が80年の輝かしい業績を遺して逝去したのにパリ市民が平然としているのは納得できないとメリメに訴えたのに対してプロスペールは、「文学」は2月24日（国王ルイ＝フィリップの退位）に死んだのであって、朗々たる言葉に人が耳を傾けるには大砲が沈黙しなければならないと答えている。革命のバリケード騒ぎの中では、一文士の死などは問題にならないと

いうわけで、これは普仏戦争直後の動乱最中のメリメ自身の死を思い合わせると甚だ興味ぶかい。じじつ時代は過ぎゆき、絶世の美女レカミエ夫人も寄る年波には抗しがたく、しかも失明の不幸に見舞われていたのだった。そしてあれほど賑わった彼女の「森の僧院」のサロンも、訪れる人はアンペールほか二、三の親しい者だけだった。

話は前後するがメリメは47年9月13日発信の Alexis de Tocqueville 宛の手紙でアンペールに触れ、「たいへん元気で鉱泉から帰ってきた彼は、いま看護人の職務に励んでいます。なんでもシャトーブリアンがレカミエ夫人と結婚したがっているようで、彼女はそれを拒んでいるが、結局は負けるだろうと、人びとは思ひこんでるそうだよ」といっている。アンペールはエジプトで罹った喉頭の炎症が再発して、47年7月29日に Hautes-Pyrénées 県の Cauterets に赴いていたのだった。レカミエ夫人も白内障の二回目の手術をした直後だったが、シャトーブリアンの世話をするために立ち戻った。「そこでジャン=ジャックは、いままで以上に頻繁に Abbaye-aux-Bois を訪れた。毎日彼はレカミエ夫人を rue du Bac のシャトーブリアンの住居へ連れて行った。その寂しい部屋の中で、中風病みと盲同然の彼の守護神とのあいだにあって、彼は数時間を過していた」と。
 (“Andr -Marie Amp re et Jean-Jacques Amp re,” t II より)

47年2月9日にシャトーブリアン夫人が逝去した後数か月して「“M moires d'outre-tombe” の著者は、その晩年の良き天使の役をした女性に烈しい感謝の意を表しながら、自分の名を持つことを懇願した。その結婚申込みは切々と訴えるものがあつたので、レカミエ夫人もふかく心を動かされた。が、やはり彼女は、頑として応じなかったという」。( douard Herriot : M^{me} R camier et ses amis, Paris. 1913, t. II より)

アンペールは1848年7月19日に、Grand B  の岩の上で埋葬されるシャトーブリアンの遺骸に付き添って Saint-Malo まで行かねばならなかった。彼はアカデミー・フランセーズの議長代理として弔辞を読んだ。それにつ

いて彼は、レカミエ夫人に書き送っている。

「わたしの目的は、わたしが見たままの、わたしが愛したままのシャトーブリアン氏をみんなに知らせることでした。どれほど彼が国民に知られることを望んでいたか、またあなたがどれほどそうなることを望んでいたかということを……わたしはあなたのことを話しながら泣きたくてなりませんでした……」

そのレカミエ夫人も、翌年5月11日にこの世を去った。アンペールはその年1月2日から Sainte-Beuve に代って、Bibliothèque Mazarine の管理委員に任じていたが、レカミエ夫人の死後その職を辞して、スペインへ旅立った。『レカミエ夫人、その若き日の友だち』の著者ルノルマン夫人によると、「アンペールはスペインを知らなかった。彼の忠実な旧友で、フランスのアカデミー団（五つのアカデミーの連合体）の図書館員である Roulin 氏は、またルノルマンとも仲がよかったが、アンペールはこの人とならレカミエ夫人について語り合えると知っていたので、国境で落ち合うことにしてオーヴェルニュからスペインへと向った」とある。

アンペールはさらに51年8月28日に Southampton からアメリカへと船出した。そして翌年5月10日に「コレージュ・ド・フランス」で講義を開く準備をするために、パリへ帰るはずだった。メリメはこの旅行については知らせを受けていなかったののでいささか気を揉んでいるらしいから知らせたほうがいいと、Alexis de Tocqueville がアンペール宛に書いている。メリメ自身も51年9月の某日（火曜日）に Charles Lenormant 宛の手紙の二伸で、「いったいアンペールはどうなったのだろうか？」と、その消息を尋ねている。

アンペールは51年8月28日にメキシコに到着、そこからメリメ宛に短信を出している。「メキシコは16世紀のアンダルシアで、修道士、セレナード、las calles rondas（環状遊歩道）、les cuchilladas（けんか）といったこの世の天国だ」と。

1852年9月13日、ルイ・ナポレオンの勅令で「フランスのポピュラーな詩の全集」を刊行するようにと命令があった。アンペールが、この詩集の編纂に当たった。彼はそれに、Sainte-Beuve から手渡された シャンソン “Femme du roulie”（荷車輓夫の細君）を入れた。これは Champfleury に、写実主義のための彼の宣言の一つに口実を与えたと言われている。

アンペールは55年10月1日にマルセイユを発ち、ローマに至った。翌年3月8日発信の手紙で、メリメは彼宛に書き送っている。アンペールがナポリにいるか、それともシナにいるかわからないので返信が書けなかったと述べ、そしてもしもその秋もイタリアに止まっているようだったら、一緒にシシリアへでも行こうかといっている。しかしメリメはその秋イタリアへは行かず、12月にニースに赴いた。

メリメは57年6月9日発信の M^{me} de la Rochejaquelein 宛の手紙で、アンペールの肖像を描いている。

「わたしが少年の頃から知っており、尊敬し、且つ羨望している一友人についてお話ししましょう。ジャン=ジャックはまったく非の打ちどころのない性格の持主でして、一か月小アジアの旅行を共にし一つ畳に寝泊りしましたが、これほどすばらしい友はありませんでした。あの男がどのような場所でも自分の考えを追求し、研究をすることができるのには羨ましく思いましたよ。ある晩エヘーズで、この地方特有の嵐にあったことを思い出します。山々にこだまして、じつにすさまじかった。わたしたちは宿舎にあてられた粗末な建物の食堂にいましたが、わたしが稲妻のジグザグに見入っているのに、あの男はシナの本なんかに読み入って、小さなランプの灯影でノートをとっているのです。彼はいつでも、どのような場所でも仕事ができるのに、わたしは自分の机の上でなければ、何一つできないのです……アンペールの不幸は、いやおそらく彼の幸福は、その身についている独特の尖った角が彼の愛していた一人の婦人によって滑らかにされたことでして、わたしは別にそのことを苦にはしませんよ。たぶんあ

あなたは、レカミエ夫人をごぞんじでしょう。わたしは必要とあらば抱かねばならぬ憎悪感を彼が決して持たなかったことを、ただただ責めるのみです。あのひとはすべてをよしとし、少くとも誰でも賞賛するのです。彼女はあなたを脇へ呼んで、あなたのことを天才だと言うでしょう。このように家の中で行われる、この世の最もエゴイストである人間に対する礼拝の儀式が、わたしをしてあの人に嫌悪感を抱かせたのです。にも拘らず、あの人は根は善人だと思いますよ。わたしが彼女に対して不当なのだと思います。でも最初の印象というものは、なかなか消えないものですね」。

1858年8月から10月にかけてメリメはイタリアの各地をまわり、フィレンツェでアンペールに出会った。天候に恵まれたせいもあって彼は同地に一か月も滞在し、ジャン＝ジャックにフィエソレスやそのほかあちこち案内してもらっている。同年アンペールは、“*Histoire romaine à Rome*”を刊行する。

59年1月29日にアンペールは、歴史劇『カエサル』を Michel Lévy から刊行した。それについてメリメは、2月5日カンヌ発信の年来の女友たち Jenny Dacquin 宛の手紙の中で触れている。「それはそうと、最近に出たアンペールの『カエサル』をお読みになるようにお勧めします。それについては何か言わねばならないのですが、それがアレクサンドリアふうの十二音綴りの詩句で書かれてあるので、わたしは恐れをなしてしまふのです。あなたの読後感を承りたいものですね。なにしろ詩を読むことは苦手なものですから……」

メリメはついに、この作品については論評しなかった。同年アンペールは“*Commission spéciale pour l'Histoire de la Langue Française*”を辞任した。この仏語史のための専門委員の顔振れは次のとおり。 Villemain, J-J. Ampère, de Pongerville, Cousin, Patin, Sainte-Beuve, Viennet。それについてメリメは、6月24日と8月2日発信のジャン＝ジャック宛の手紙で、彼の翻意を促している。なおメリメ自身は、ついにこの委員には

ならなかったことを付言しておく。

「昨日ヴィルマン氏が君から委員を辞職する旨の手紙をもらったといって、その手紙を見せたよ。わたしは君の考えには同意しがたく、わたしのためにも君が思い直してくれるようにと切望する。というのは、ヴィルマン氏もクーザン氏も、わたしが君の後任になることを望んでいるからなんだ。それはわたしとしては出来ないし、またしたくないからね。わたしは嫌だよ。大部分の連中は大いに気にしているが、自分では欲しくない些細なお手当など貰うべきではないと思うよ。連中はこう言うだろう『われわれが君になってもらいたいのは、なにも君の慧眼のためではない。君がなってくれば、嫌な奴を選ばずにすむからさ』とね。わたしは言い返してやるよ『そりゃあ、わたしが列席すれば、君らは大喜びだろうよ。わたしはアンペールの影なんだからな。わたしは彼の代りに出席するので、臨時に会議に出るだけさ。そういうわけだから正式の会員にはなりたくないよ』。だからこの件をうまくまとめるには、現状維持しかないことがわかりだろう。君の疑^{ぎぐ}懃逡巡は、なんの役にも立たんさ。もし君が辞典の手当を受けとっておきながらお役ご免ができると思ったら、とんでもない君の間違いだよ。なぜなら君はすでに選択する言葉や註を送ったのだから、もらった金に対しても別のものを送らねばならんからね。それにわたしが会議で君の代理を務めにゃならんし、そしてわが同僚に癩癩を起させるとなりゃあ、君にもなんらかの償いをしてもらわにゃならんからね……」

さらに8月2日の書信では、「わたしはヴィルマンとクーザンに、君のゆるぎない気持を伝えておいた。またわたしの気持も変わらないと言い添えておいたので、だれもアカデミーには正式に問題を持ちださず、また代りを見つけれたりしないで、当分現状維持がつづくだろうよ。わたしは Tocqueville の後継者として一人の言語学者をなぜ直ちに選ばなかったのか了解到苦しむね。もっとも、そのような男がどこにいるかは疑問だがね……」

メリメは1862年5月30日、British Museum 発信の Mistress Senior 宛

の手紙で、同嬢から贈られた Mohl 夫人の著書 “M^{me} Récamier, with a sketch of the history of society in France” に触れ、例によってレカミエ夫人をこきおろしてからアンペールのことを述べている。「わたしの親友の一人が彼女に烈しい恋をしていました。その男はたいへん情熱的で、また気まぐれであり、甚だ変った性格の持主だったのです。彼女は彼を少しずつ飼い馴らし、彼を従順な、世間一般の俗っぽい男にしたのです。まことに奇妙なことに、あの女は彼の心情を破壊したのでした。ですから彼女が亡くなったとき、それで彼はほっとしたような気持になったように、わたしには見えましたよ。あの男は自分からは遁れ出る勇気がなかった、彼自身をへとへとにさせた倦怠感や義務感から脱け出ることができたのです」と。それからメリメは、レカミエ夫人を知るにはパリのああいってサロンの無味乾燥さを知るべきだと言及している。

アンペールは1864年3月24日に、Pau で逝去した。そのアカデミー・フランセーズの後任者として、翌年4月6日に Prévost-Paradol が襲うことになったが、それについてメリメは、65年4月14日カンヌ発信ジェニー・ダカン宛の手紙で触れている。

「ところで、頭の古い連中にかつがれてアカデミー入りをするあなたの友人パラドール氏は、そのために気の毒にも、痛風で八十歳の高齢だという duc de Broglie に対し、パリへ帰って来るようにと要請したんですってね。アンペールはじつにくだらんカエサルの史話を、しかもそれを韻文で書いたのですからね。ですから当日パラドール氏が、頭の古い連中は別として皆から忘れられているこの作品のことを、この機会を利用してさぞかしいろいろと当てこすりを言うだろうと思いますよ」。メリメはよほど彼の『カエサル』が嫌いだったとみえる。プロスペールは68年3月29日カンヌ発信の Sainte-Beuve 宛の手紙で、後年サントブーヴが『新月曜物語』へ入れるべきアンペールについての人物評論を書く資料を書き送っている。

「わたしが12歳、アンペールが15歳のとき彼と識った。彼の性格はレカ

ミエ夫人の配慮により徹底的に修正させられた。彼は非常に活潑で、気性が烈しく、決断力があつた。それなのに彼女は彼の鋭く突き出た部分をすべて削りとり、彼のもつ粗野なものを取り除いたのだった。

昔のことを思いだしてみると、彼は最初詩に対して興味をもったようだった。わたしが中高等学校を出たとき、彼はアッチラについての詩と、Adelghis の悲劇を書いていたのを思いだす。地方色が彼を大いに魅していたのだ。Fauriel についての知識を与えてくれたのも彼である。彼はわたしに会った最初に、この詩人について語った。『これがもらった二冊のセルヴィアの詩集さ。セルヴィア語を勉強したまえよ』。その頃わたしは、人から言われることに何でも反対していた。まず Fauriel を毛嫌いした。後になって彼の勧告に従わなかったことを後悔したが……」それからアンペールの不幸の原因をなした彼の好奇心について語り、ただ「言語学については、彼は特別な素質をもっていたと思う。彼は自家薬籠中のものになっている文法の知識で、ある国固有の言語とその特性を直ちに捉えた」と賞賛し、「彼の最大の不幸はすべての兎を同時に追い求めたことであって、一匹の兎を認めたかと思うと、それを見捨てて別の兎を追い駆けるのだ」と。メリメはなおもつづける。

「これほど勝れた心情の持主はなく、これほど天真爛漫な人はなかった。それだけにこれほど御しやすい人はなかった。彼ははじめてレカミエ夫人を知ったとき、シャトーブリアンをライバルとして恐れた。ところがそのうちに飼い馴らされて、そのシャトーブリアンの取り巻きになってしまった。わたしは彼が（今は亡きダフネの後裔の）囲いの中にあつた月桂樹の一枝をとり、それに4頁にわたる祝いの言葉を添えて、シャトーブリアンに送ったのを見たことがある。

彼はいつも仕事をしていて、いかなる環境の下にあつても仕事に没頭できる特質を身につけていた。（そしてメリメは前述の共に過したエフェーズの情景を記している）。

彼は非常に高い知性の印象をわたしに与えた。だがその知性は、それが作られたものそれ自体には適用することができないし、適用することを知らないのだった。それに加えて、彼自身けっして身を守る術を知らず、常に支配されてしまう俗世間の影響があった。

彼は書くことよりも、はるかに上手に喋るように思われる。彼の会話は魅力があった。そこには、ペンでは表せない大胆さがあった。君は Thunderten-trunckh を殺してすぐに Candide が呼ぶ言葉を知ってるだろう。『Journal de Trévoux はなんと言うだろうか？』っていうあれさ。アンペールはいつの場合も、すべてのことに関して『Abbaye-aux-bois のサロンではどう思うだろうか？』って考えるのさ。一言にしていえば、この男は最も男らしい性向をもって生れたのだが、あだっばい姥桜のために去勢されたのだ」。

サント＝ブーヴのアンペール論は、68年9月1日の「両世界評論」誌に掲載された。

わたくしはメリメの若い頃からの友 J-J. Ampère の生涯を知りたく思い、メリメの書簡全集を通じて本稿をまとめた。J-J. Ampère と M^{me} Récamier. の関係については L. de Launay; Un amoureux de M^{me} Récamier. Journal de J-J. Ampère (Champion, 1927), E. J. Delecluze; Deux Romans d'amour chez M^{me} Récamier, texte présenté par L. Desternes (Juliand, 1954) があることを言い添えておく。

〔参考文献〕

Prosper Mérimée; Correspondance générale Vol, 17 (Le Divan & Privat, 1964)

Prosper Mérimée; Portraits historiques et littéraires (Calmann-Lévy)

Augustin Filon; Mérimée et ses amis (Hachette, 1894)

村松嘉津女史; 巴里文学散歩正・続 (白水社)

拙訳著; ある女への手紙 (岩波書店)

拙訳著; 賈のドミートリイ解説及び年譜 (筑摩書房)